

# 新十津川昔話【前編】

奈良県十津川郷の大水害を経て、明治23年(1890年)にトック原野(現在の新十津川町)の大地に一步を踏み入れてから今年で120年。今月号と来月号の2回に分けて、未曾有の水害に襲われた家族が、厳寒の北海道を目指して、今日の「新」十津川をどのようにして切り開いてきたかを、昔話風に分かりやすくお届けします。

これからも発展し続ける郷土新十津川に、限りない愛着を持ち続けてほしいと思います。

それは8月の  
雨から始まった…

明治22年8月、奈良県吉野郡一帯をとつともない豪雨が襲った。

その中に「鳥も通わぬ十津川の里」と太平記に書かれた山村十津川村があつたのである。山や谷壁がなだれ落ち、溪谷をせき止め、せき止められた大量の水がせきを切つて濁流となり、猛烈な勢いで家や逃げ遅れた人々に向かっていく…。



壊滅的な被害に…

当時、6つの村からなる十

津川郷は壊滅的な被害を受けるほどの大水害であつた。死者168人、全壊および流出家屋426戸、耕地の埋没流失226畝。山林の被害も甚大であつた。生活の基盤を失つた者は3000人にのぼり、その救済が急務であつた。生活再建のため、移住が話し合われ、移住先にハワイなどの海外や国内の未開懇地が候補にあがつた。



北海道へ移住を  
決意した…

新たな生活地を求めて600戸、2489人が北海道への移住を決定した。必ずや第2の郷土を建設する」と、固い意図を胸に秘め旅立つことに

なった。10月に3回に分かれて神戸から船に乗り小樽へと向かう。



このころ1200キロ離れた北海道では、屯田兵制度に続いて明治19年には植民計画が採用され、全道的な開発が始まるうとしていた。特に樺太経営とロシア南下への防備対策から、石狩平野開拓は緊急課題であつた。

初めての  
北海道の冬を…

小樽から市来知(現在の三笠市)までは汽車で、その後徒歩で空知太(現在の滝川市)へ。病人や老人、子供は囚人に背負われた。空知太の屯田兵屋は建設中であつた150戸しかなく、1戸に移民4戸が入つた。

そんな中でも、トック原野への入植準備が進められ、新しい村の名前も決められていた。また、一致団結して開拓を成功させようと、「移民誓約書」を作り、署名捺印した。



遅い北海道の雪解けを待つて、石狩川を渡り、植民区画の第1号としてトック原野に

雪解けを待つて  
石狩川を渡る…



移民誓約書：  
7条から成り、移住者各戸主が連署して、気の緩みを引き締め、励まし合い、助け合いながら開拓を成功させることを誓ったもの。



(絵 井上正治さん)  
後編につづく…

だが、大木が生い茂る未開の大地、厳しい自然が移住者の前に立ちふさがる。



入植した。明治23年6月のことであった。



120年の節目に新たに建立された水害慰霊碑の除幕

## 母村・十津川村で 水害慰霊祭と置村120年記念式典

明治22年の大水害から復興を果たし、置村120年を迎えた母村で、水害慰霊祭と置村120年記念式典が8月20日に行われました。

本町からは、植田町長と長名議長が出席し、水害慰霊碑の除幕と、献花をして犠牲者を追悼しました。



告諭：  
明治22年、北海道移住団が十津川郷を旅立つとき、奈良県知事税所篤篤から出された激励文。

十津川郷の6村が合併し、十津川村が誕生したのは明治23年6月18日、今から120年前のことです。大水害から1年足らずで村を起こしてきます。

告諭には「今後、ここ（十津川郷）で生活を再起することとは、非常に難しく、たとえ幾十年も苦勞して復興を行っても到底充分な発達を見込めることは、今の段階で期待することができません」とあり、惨状をうかがい知ることができません。

この絶望的状况からわずか1年で復興を成し遂げた影には、先人の郷土を愛する強い思いがあつたに違いありません。



水害慰霊碑に向かい追悼の言葉を述べる植田町長



置村120年記念式典で祝辞を述べる植田町長